太陽をつかむ男

小説 坪内寿夫

高杉良

太陽を、つかむ男

高杉良

小説　坪内寿夫
太陽を、つかむ男
昭和六十年二月二十五日初版発行
昭和六十年五月二十五日四版発行

著　者　高杉　良
発行者　角川春樹
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二―十三―三
電話　営業部〇三―二三八―八五二一
　　編集部〇三―二三八―八四五一
振替口座東京三―一九五二〇八　〒一〇二
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
Printed in Japan
ISBN4-04-872403-7　C0093

目次

第一章　非常呼集　五
第二章　安楽死の声　三七
第三章　作家の忠告　六九
第四章　大将の出番　八六
第五章　饅頭事件　一一五
第六章　幹部研修　一四六
第七章　辞表提出　一八七
第八章　スト突入　二三八
第九章　大将倒れる　二六〇
第十章　奥道後の決意　三一五
参考文献　三五三

装丁・本文插画　辰巳四郎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

小説　坪内寿夫

太陽を、つかむ男

第一章　非常呼集

1

松山市北持田の坪内寿夫邸に、日本商工会議所会頭の永野重雄が秘書の西堀を伴って訪ねて来たのは、昭和五十三年五月五日金曜日、午後二時過ぎのことである。来島どっくを中核とするグループ百数十社を率いるオーナー経営者の坪内には、日曜も祭日もない。この日も、引きも切らず来客が続いていた。来客といっても、ほとんどが関連企業の幹部社員である。

平日より時間を割いてもらえるから、休日に自宅へ押しかけて来る者が少なくない。連絡を密にせよ、と坪内は社員に厳命している。瑣事瑣末と考えられることがらでも、ときとして大局に影響を及ぼす問題が潜んでいないとも限らないので、万遺漏無きを期せと言うわけであろう。

坪内は、部下の意見、提案に熱心に耳を傾けるし、よかれと判断すれば直ちに採用するが、判断の正確を期するためにも、情報は多いに越したことはないとつねづね考えている。

大ぶりな赭ら顔で、耳、鼻、口の造作がやたら大きいが、細い小さな眼と奇妙なバランスを保って

いる。眉毛と眉毛の間隔が広く、異相というより福相で、親しみを持たれる顔だ。
居間のソファで佐伯正夫と話している坪内は浴衣がけだが、佐伯はスーツに身を包み、ネクタイも着用している。
佐伯はこの日五人目の来客だが、重要事項の報告は済み、雑談になっていた。
「昨日、知事の記者会見に今年採用したばかりの女性記者を取材に出しよりました。つね日頃から一番前の席に座れと言うてますが、そしたら、うしろからほかの記者に、女子のくせになんや！　どかんか！　といわれ、しょげて帰ってきおったんですわ。悔しいと言うてベソを掻いてました」
「可哀相なことをしたな。めしでも食うて慰めてあげなさい」
多汗症の坪内は、会社でも家でも冷たいおしぼりを片時も離さないが、顔の汗を拭きながら眼のあたりをこすったところを見ると、眼がしらが熱くなっていたのかもしれない。坪内には涙もろいところがある。
佐伯は、まだ三十三歳の若さだが、日刊新愛媛新聞の取締役総局長として、実務面を担当している責任者だ。
観光、映画、ホテル部門も受けもたされているが、仕事がめしよりも好きで、一年三百六十五日、一日も休日を取らないという変りダネである。坪内好みの猛烈社員で、佐伯の真似をできる者は一騎当千の来島マンの中にもさすがに一人もない。
「女性記者を活用しろというオーナーのアイデアは、目下のところすこぶる好評です」
「そうじゃろう」
坪内がうれしそうに返したとき、お手伝いの佳子が居間へ入って来た。佳子は、妻の紀美江の遠縁で、今年二十二になる。色白で眼鼻だちのはっきりした娘だ。

「永野さんとおっしゃるかたがお見えです」
「永野さんって、永野会頭のことかね」
「さあ。お年寄りのかたです」
「こんなところへ、永野さんが見えるわけがないじゃろう？　どちらの永野さんか訊いてくれんか」
「はい」
佳子は、ほどなく今度は名刺を一枚持って引き返して来た。見ると「新日本製鉄株式会社　取締役相談役・名誉会長永野重雄」とある。ソファから起ちあがって、坪内の手にある名刺を覗き込んだ佐伯が調子の外れた声を洩らした。
「ほんまに永野会頭ですね。どうしましょうか。わしがおらん言うてきましょうか」
「そうもいかんじゃろう」
坪内はかすかに眉宇をひそめた。佐伯が居留守を提案したのは、坪内が永野に会いたくない理由を承知していたからだ。いわば永野は、坪内にとって招かざる客であった。
「永野さん、お一人か」
「いいえ。お二人です」
「とにかく応接間へ案内してお茶を出しなさい。紀美江はまだ帰らんのか」
「間もなくお帰りになると思います」
佳子が廊下を小走りに立ち去って行く足音を聞きながら、坪内は、三時以降の予定をキャンセルするよう秘書に命じ、「永野さんも熱心なことじゃのう」とひとりごちてから、百キロの巨体をゆすぶるように寝室に運び、浴衣をワイシャツに着替えてから応接間へ顔を出した。

永野が、五月の連休にわざわざ来松したのは、なんとしても佐世保重工業（ＳＳＫ）の経営を坪内に引き受けさせたいと考えていたからである。

経営危機に直面している佐世保重工業の救済問題が表面化したのは四月初めだが、第一勧業銀行を幹事会社とする銀行団と、来島どっく、日本鋼管、新日本製鉄、日商岩井の四大株主間の思惑、利害が複雑に絡み合って、いまだに漂流を続けている。長崎県、佐世保市の地元自治体、および福田政権を巻き込んで、ＳＳＫの救済策が模索されていたが、調整役に担ぎ出された永野は、坪内をＳＳＫの社長に引っ張り出し、経営主体を確立することが先決だと考えていた。もちろん、希望退職者千六百余人の退職金八十三億円をいかに工面するか、この債務保証をどうするか、再建計画の具体的なプログラムをどう固めていくかなど難問を抱えているが、坪内さえ首をタテに振ってくれれば、再建に向けて体制を整備することはできると読んでいた。そのために、坪内がＳＳＫの経営を引き受けられる環境づくりを永野なりにすすめてきたつもりだった。

もちろん、永野はアポイントメントも取らずに坪内を訪ねて来たのだが、万一、坪内が留守で、会えなくても、情誼に厚い坪内のことだから、そのことを多としてくれるはずである。ここまでやって、坪内があくまで拒否し続けるなら、そのときはきっぱり諦めよう、と肚を決めていた。

ノックの音が聞こえ、坪内の巨体が応接間にあらわれた。

「やあ、お休みのところを恐縮です。ちょっとそこまで来たんで、寄らしてもらいました」

秘書を帯同して松山くんだりまでやって来て、ちょっとそこまでもないもんだ、と思いながらも、永野のそのひとことで、坪内は気持がほぐれ、永野の差し出した手を笑顔で握り返した。

「お待たせして申し訳ありません」

「門前払いを食わされると思いましたよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「失礼しました。まさか永野さんがお見えになるとは思いませんでしたから。さあどうぞお座りください」

腰をおろしかけた秘書の西堀が「つまらんものですが」と包みをテーブルに乗せた。

「ありがとうございます」

「会頭、わたしは席を外してましょうか」と、西堀が中腰の姿勢で永野のほうをうかがった。

「うん。そうしてもらおうか」

「わたしのほうは構いませんがな」

「いや、坪内さんと内緒話もしたいから、外してもらおうか」

「そうですか」

坪内は、佳子を呼んで、西堀を別間に案内させた。

二人になったところで、坪内が言った。

「こんな田舎の陋屋へよくお出でくださいましたなあ」

「さすがは坪内さんじゃ、空港でタクシーを拾って、坪内寿夫さんのお宅と言ったら、すぐ運んでくれましたよ。なかなか風情のあるいい家じゃないですか」

永野は、あたりを眺めまわしながらお上手を言ったが、〝四国の大将〟にしては質素なたたずまいに内心びっくりしている。

日本銀行松山支店長の旧役宅を買い取ったのだが、昭和初期の建築だから、相当な年代ものと言える。柱は太くて立派だし、ガタがきているというほどのこともないが、隣接地に建てられた瀟洒な現役宅とはまことに対照的である。一年前まで、坪内夫妻は北持田から徒歩十分ほどの一番町に住んでいたが、訪ねて来た客が探しあてるのに苦労するほど文字どおりの陋屋だった。

永野が緑茶をひと口すすって、さりげなく切り出した。

「坪内さんは、醜女の深情けだと思ってるんでしょう？　迷惑千万でしょうが、どう考えてもあんたしかおらんのです」

きたな、と坪内は思った。

先月二十七日に東京で会ったときも、永野は坪内をかき口説いた。「天下国家のためにひと肌脱いでくださいよ」「佐世保重工の経営責任者になれるのは坪内さんを措いてほかにいません」「あなたが受けてくれないと、僕は日商会頭を辞めなければならない。僕を男にしてくださいよ」

財界の大御所といわれる天下の永野重雄がそこまで言って、頭を下げたのである。しかし、坪内は受けなかった。

「永野さんの熱意とご努力にはいくら感謝してもし切れるものではありません。しかし、日本鋼管と第一勧業銀行が前面に出るべきです。それが筋というものです」

つい一週間ほど前のことだが、あのときの永野の、なんとも切なそうな顔が思い出される。また、同じシーンを繰り返さなければならないのか――そう思うと坪内は胸がふさがってくる。

「永野さんにお会いした次の日じゃったから先月の二十八日じゃったと思いますが、中村次官と謝敷局長に、お受けしかねるとお伝えしました。わたしとしては最後通告のつもりです」

坪内のいう中村次官とは、運輸省事務次官の中村大造のことであり、謝敷局長は同省船舶局長の謝敷宗登を指している。事実、このことは四月二十九日付で各紙にとりあげられた。例えば、日本経済新聞は次のような坪内の談話を掲載している。

永野さんは私に佐世保重工業の経営をやってほしいようだったが、私はきょう（二十八日）運輸

省の中村次官に佐世保重工の経営に乗り出さないことを伝えた。三年前なら、経営を引き受けられたが、今のように悪くなってしまってからではできない。もし、経営を引き受けたら、来島どっくの業績にも悪い影響が出てしまう。

「坪内さんが受けてくれなければ佐世保は潰れますよ」

「いままでの経緯から言っても、日本鋼管が出るのが筋です。槙田社長を口説いてください」

「坪内さん、本気ですか。仮りに槙田君が受けてくれたとして、佐世保重工を再建できると思いますか。思っとらんでしょうが」

「……」

坪内は言葉に詰まった。八十三億円の融資について第一勧銀などの銀行団が大株主四社に保証を求めているのは、再建の見通しを厳しくみているからでもある。四十八年末の第一次オイルショック後、造船不況は日増しに深刻の度合いを深めている。坪内が率いる来島どっくグループは、厳しい合理化努力によって、不況を乗り切ったし、今後も生き残れる自信はあるが、造船部門を持つ日本鋼管は、主力の鉄鋼部門の不振もあって、経営が悪化していると伝えられている。おそらく、佐世保重工どころではあるまい。それ以上に坪内は社長の槙田久生の経営手腕を評価する気になれなかった。佐世保重工を再建できる者がおるとしたら、わししかおらん――。

永野は、坪内の胸中を忖度していると見え、ここを先途と語勢を強めた。

「仮定の話をしても始まらんでしょう。槙田君は、佐世保の再建に乗り出すつもりは毛頭ないんです。だいたいあの男は、誠実さが不足している。それに佐世保が潰れたらどうなりますか。佐世保の倒産が引き金になって瀬戸内周辺の中小造船所は将棋倒しです。軒並み倒産しちゃいますよ。佐世保

市は潰滅的な打撃を受けるでしょう。地域社会、地域経済の混乱にとどまればまだいいが、造船大手の一角が崩れれば、日本全体の景気回復に水を差す結果になりますよ。大変な社会問題です。坪内さんは佐世保の株式の二五パーセントを保有している。四十五億円の資本金の二五パーセントなら十一億円強だが、株を買ったときは三倍以上してるでしょうが。三十億円以上の株が紙クズになってしまっていいんですか」

「それは仕方がないですよ。ひと様に迷惑をかけるわけではなく、わたしが損するだけですから……」

坪内は苦笑したが、すぐに表情をひきしめた。

「わたしは筆頭株主でありながら、経営上のことで口出ししたことはただの一度もありません。いや、口を出させてもらえなかったのです。三年前、白洲次郎さんの斡旋で、大洋漁業の中部さんから、佐世保の株を買うたとき、佐世保の経営を頼まれ、会長になってくれと言われたので、お受けしたら、槙田さんはいったんは了承しておきながら断わってきました。わたしにあの時点で佐世保の経営をやらせてもらったら今日のようなていたらくにはしてません。村田社長にしても、中間配当を実施しておきながら、期末で無配にする始末です。こんなでたらめな経営姿勢がありますか」

坪内は顔を真っ赤に染めて話している。

永野は、じっと耳を傾けていたが、初めて聞く話ではなかった。しかし、辛抱強く聞いていた。坪内の無念な気持は痛いほどよくわかる。

「槙田さんは卑怯ですよ。鋼管から社長を出しておきながら、鋼管とは無関係とは、なんていう言いぐさですか。わたしの会長就任を拒否した鋼管がこの期に及んでわたしに佐世保の社長をやれとはよう言えんでしょうが。永野さん、どう思われますか」

「……」

永野は、黙ってうなずくしかなかった。槙田に対する坪内のわだかまりは相当根が深い。三年前、自分に佐世保をまかせてくれれば、こんな経営危機を招くことはなかったのに、と切歯扼腕する思いなのであろう。

「永野さんのお心をわずらわせて、ほんとうに申し訳ないことですが、家内も、会社の幹部も、来島どっくのメインバンクも、みんな佐世保の経営を引き受けることに反対してるんです。わたしも、経営を引き受けないと中村次官に伝えました。じゃから、みんなホッとしてます。せっかくお出でいただいたのに、お役に立てなくて申し訳ありませんが、奥道後の温泉にでもつかって、ゆっくりしてってください」

坪内はテーブルに手を突いて深々と頭を下げた。

永野があわてたもの言いで返した。

「困ります。頭を下げなければならないのはわたしのほうですよ。坪内さん、きょうは多少手土産も用意してきましたから、それを見てから、結論を出してください」

「手土産ですか」

坪内は、怪訝な顔でテーブルの包みにちらっと眼をやった。

「それは、菓子折りです」

眼鏡の奥でやわらかいまなざしに微笑がにじんでいる。

「徳田銀行局長がハッスルしてるんですよ。おととい日債銀の勝田さんに会って、坪内さんの出馬について了承方を求め、OKを取りつけてくれました。それから坪内さんが佐世保を引き受けてくれれば、興銀は佐世保のメインバンクになってくれると思います。頭取の池浦さんが外遊中なので、帰

国し次第、これも徳田さんが責任をもって説得すると言ってます」

「そこまでやってるんですか」

坪内は絶句した。

永野の言う手土産は、坪内が考えている以上に中身の濃いものだったのである。

大蔵省銀行局長の徳田博美が佐世保救済に懸命な取り組みをみせていることは承知していたが、来島どっくのメインバンクである日本債券信用銀行の勝田龍夫会長に会って、わしが佐世保の再建に乗り出すことを了承させるとは、並々ならぬ政治力ということができる。おとといと言えば、五月三日だから憲法記念日だが、祭日にわざわざ勝田邸へ出向いてくれたのだろうか——。しかも日本興業銀行の池浦喜三郎まで表舞台に引っ張り出そうとしている。坪内は、苦み走った徳田の顔を眼に浮かべながら、粛然とした思いになっていた。

外堀は埋められつつある——。坪内は気持が揺れ動いていた。絶対に受けてはならぬと胸に誓ったはずなのに、おまえならやれる、おまえ以外に佐世保を救えるものはこの世にいない、という囁き声がどこからともなく聞こえてくる。まるで神の啓示でもあるかのように。

2

坪内にはノックの音が聞こえなかったが、永野が居ずまいを正したところをみると、それと気づいたようだ。

「留守をしてまして、申し訳ございません。ようこそお出でくださいました」

紀美江は、長袖のワンピースの小ざっぱりした身なりで顔を出した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com